

はかな
儂の進行態

— はかなく移り行くもの —

東京芸術大学大学院

美術研究科 油画研究領域

学籍番号 1319907

李菲菲

本論文が研究テーマとするのは、「消滅、虚無」の臨界に近づきつつある状態についてであり、筆者はこれを「儂の進行態」と命名する。「儂（はかな）」とは消える直前の状態を指し、同時にそれに際した人の孤独で虚しい気持ちを表す。これは舞い散る桜をみた時に、花としての生命の美しさを感じるよりも、死に近づく無常を感じ、悲しいと同時に、変化しつづけていく姿勢に美を感じる事を指している。

筆者は中国瀋陽で生まれ育ち、教育を受けた。その間、故郷では国営重工業の企業改革と大規模な撤去工事が行われ、父が経営していた会社や筆者の家、通った小・中・高校・大学の校舎も次々と撤去されていった。筆者が生きた空間と育った形跡は消え、消失への恐怖と無力感が、まるでウィルスのように筆者の思考に根付いてしまった。

本論文では、そうした消えゆくものの状態を「儂の進行態」と名付け、蠟を素材に、建築を形態のモチーフとして、その視覚化と表現化を試みている筆者の創作論を展開する。そこには消えゆくものへの哀寂だけでなく、それが何か別のものへ転化し、見た目は違っても新たな物語がそこから始まってほしいと願う、筆者の願望でもある。

本論文は、全3章で構成される。

第1章「儂の進行態-ことば、モチーフ、素材」では、「消滅した原風景」「モチーフの建築」「素材の蠟」という3つの面から、「儂の進行態」を解説する。まず第1節では、「儂」と「無常」を説明したうえで、故郷の鉄西区で実際に起こった事例をもとに「儂の進行態」を分析する。第2節では、「場」と「記憶の器」としての建築を、「儂の進行態」

の具体的なモチーフとしていることを述べる。第3節ではその表現素材として、固体と液体の間で状態変化する「蠟」を使用するに至った経緯について述べる。

第2章「『儚の進行態』の作品化」では、同様あるいは近似するコンセプトを作品化した事例について解説する。まず第1節では他の芸術家の作品事例を、「標本・残骸」「廃墟・塵埃」「クイックモーション・スローモーション」「無用」「時間・記憶」の5種類に分類して紹介する。第2節では、筆者の「儚の進行態」の作品表現を3段階に分けて解説する。第1に「消滅した風景」から「蠟・五重塔」への段階。第2に、蠟を素材とした「ガラス・無常の川」から「蠟・足のない鳥」への段階。第3に博士課程（後期）入学後、「儚の進行態」にたんなる消失へのプロセスではなく、その先の新たな可能性を探り始めた段階、その3段階について論述する。

第3章「提出作品『儚の物語』」では、博士審査展の提出作品について解説する。消失に向かう「儚の進行態」は、消失後に無に帰すわけではなく、新たな別の形の存在に転化、継承される。そのくり返しとして過去から現在があり、おそらく未来もあることを、「儚の進行態・新種の起源」として考察する。

終章では、本論文のまとめと今後の展望について述べる。

「儚の進行態」は実在するが、儚は消失へ向かう状態のため、現在の社会においてそれを認識するための「尺度」はなく、常に無視されるものである。筆者は現在発生している消失というプロセスに新たな基準とパラメータを設ける事を試みた。「儚の進行態」という尺度は、人々が今まで見逃してきた物事への感知を可能にし、対象間の関係やその盛・衰、強・弱への理解を与え、この世界をより豊かにする働きを持っていると考えている。